

Title	巻頭言 寛容の根拠
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.32, 2005.3 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4033
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言 寛容の根拠

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長

阿久戸 光晴

「異質な価値観に対しても寛容な『多文化社会』をめざすものでなくてはいけない。これもまた、（二神教的な）唯一の正義を振りかざすのではなく、多様性を受容する文化という点においては、日本社会に根付いた（多神教的な）価値観を大いに生かすことができる」（民主党『憲法提言中間報告』二〇〇四年、より）。

「けれども寛容の原理は、論理的には、相対主義ではなく、人権思想——それは相対主義が証明不可能とする一種の客観的価値観をとるものだ——と結びつくものである。……その際人々は、自己の信仰の正当性に対する信念を放棄することなしに寛容に到り得た。……もつとも自由や人権の名において思想弾圧が合理化されることはあり得る。だがそれはいかなる思想にも多かれ少なかれ免れがたい歪曲現象であり、その是正のためには、不可知論をもつてするよりも人間尊重と人権思想の真義をもつて対抗する方がより効果的であろう」（加藤新平『法哲学概論』有斐閣、一九七六年、五二二ページ以下）。

右記二つの文献を比べてみてほしい。ある事態に対し、根本的に異なる理解がここにある。本年一月を期して、自由民主党は日本国憲法の根本的改訂案策定へ向けて活発な活動を行っている。しかしその動きを批判し、政権交代を期すべき民主党は、昨年六月に「創憲」案と称し中間報告をまとめた。前者はその中の一文である。「寛容な多文化社会」は価値多元的であるゆえに、価値相対主義的であろうし、それは当然多神教的価値観から来ると断言する。そこには、多神教的価値観こそ寛容の精神の源であるという前理解がある。しかし本当にそうであろうか。これはまたしても、日本社会に深く根付いた「多神教的価値観」から来る無自覚的偏狭の精神の現れではないであろうか。むしろそこにあるのは、謙虚とは到底言えない他の異質文化に対する優越感と自己絶対化である。

まずこの中間報告には、現憲法前文に明記されている「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し」という、敗戦体験の総括がまったく見られない。近隣諸国に神社建立を強行し、日本の多神教的価値観を押し付けてきた歴史の総決算がない。多神教的価値観は、神々を相対化する自己を密かに絶対化するのである。その自己絶対化が無自覚の非寛容になることを、民主党でさえいまだに学んでいない。

異質の文化との対話は、まず互いに自己のよつて立つ規範を明確に語り合うことから始まる。安易な妥協を排し厳しい対決も起こる。場合によつては悲しい流血さえ起きかねない。しかしその体験をおして、自らのよつて立つ規範から厳しい自己検証が迫られ、またその規範自体の恒常的な厳しい点検が求められる。こうして言わば自己相対化が迫られることになる。ここに寛容の精神の誕生がある。逆説的ではあるが、多神教的価値相対主義から自己相対化は生まれず、規範に忠実であろうとす

る精神からかえつて自己相対化は生まれる。そして規範に誠実に従う精神が必ず直面する自己相対化こそが真の寛容の精神となり、やがて寛容の社会制度化となる。大木英夫氏は、この筋道を神学の立場から、神学的相対主義として提示した（大木英夫『新しい共同体の倫理学 基礎論上』教文館）。また前記のとおり加藤新平氏は法哲学の観点からほぼ同様の論理にたどりついた。いずれにせよ、寛容を真に会得し少数者の権利を確立したのは、神々を従えて君臨する多神教的自己絶対化の精神ではなく、真摯にひとりの神に仕えるためには国をも捨てて新天地に赴く打ち砕かれた精神によつてであつた。

今年（敗戦六〇年）である。この貴重な体験を「喉下過ぎた」として風化させ、「人類の多年にわたる自由獲得の成果」（日本国憲法第九七条）の歴史的由来を学ばず、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という世界のほとんどを占める「一神教を奉ずる厳しい真剣な世界」を非寛容文化として安易に排し、多神教的精神を寛容の母として調停役を買って出たとしても、信用もされず問題にもされないであろう。いささか東洋的アナロジーではあるが、六〇年は還暦である。一巡した六〇年を振り返り、貴重な敗戦が真に学ばれたとは言えまい。もう一度初心に帰り、他者を揶揄する前にまず自らを検証し、寛容の制度化の淵源を学びなおす必要がある。この学びに立ったときに初めて、自己相対化でなく自己同一的絶対化へ至る諸々の原理主義的ドグマ化精神にも切り込める。当研究所がこの学びの大きな突破口となることを期したい。